

【講演内容】

「脳からみた食べる」

公立大学法人 九州歯科大学

共通基盤教育部門 教授 吉野 賢一

「目で見える」「口で食べる」「歯が痛い」は一般的には間違っていないが、脳科学的には「脳で見える」「脳で食べる」「脳が痛い」が正解です。講演では、錯視や多義図形で「脳で見える」を実感した後、認知期（先行期）での脳の働きを解説して「脳が食べる」をご理解いただきます。

動物の「食べる」は低レベルの脳（視床下部）に忠実です。空腹になれば食べ、満腹になれば食べません。したがって野生の動物に食べ過ぎはなく、肥満になることもありません。栄養や生命・健康維持の視点から見ると「動物の食べる」は正解です。一方、人は空腹でも食べない、満腹でも食べることがあります。同じ視点で見ると不正解とも言える「人の食べる」は、高レベルの脳（大脳皮質）が働き、低レベルの脳の働きを修飾（抑制）するために起こります。工作中なので空腹でも食べない、もったいないから満腹でも食べる、は人のもつ優れた脳が可能にした「人の食べる」なのです。